

報告 1 フィンランド

オーロラ小学校 インクルーシブ教育の課題

Auroran koulu (直訳でアウロラ学校)。フィンランドで新設される学校(基礎学校)は、日本でいうところの小・中学校の9年制だけど、この学校は創立58年と古く「小学校」のみ。なのでわたしたちは「オーロラ小学校」とよんできた。

ここでダウン症児らと健常児たちがいっしょのクラスで学ぶインクルーシブ教育が前年からはじまったと聞いた。エスポー市で2校目で、フィンランドでもめずらしいとのことだった。

はじめて訪問したのが2007年1月8日。彼らは2年生(学校は秋はじまり)。音楽と演劇、パソコンが大好きという赤ら顔の当時52歳の校長は、じつに精力的で、全校集会ではエレキギターを弾き、障害児担任の若い女教師がメインボーカルで登場して圧倒された。あれから、4年生、6年生となった彼らの授業参観をし、校長らと交流してきた。

○中学校で彼らはどう育っているのだろうか？

○校長はインクルーシブ教育をどう総括して、なにを今課題としているだろうか？

○エスポー市(人口25万)はどう評価しているか？

◇◆◇

「やあ やあ やあ～ よーおこしやす！」て感じの関西弁を想起させる校長のヘレストローム・マルッティがたくさんの鍵をぶら下げて早足で登場。

オーロラ小学校は、現在356人が16のクラスで学んでいる。知的障害のある子が3人、視覚障害のある子が1人。教師は24人+アシスタント4人+1人(インクルーシブ教育担当)。1クラスの数は、1年～2年の低学年時は24人、3～6年は32人。

ヘレストローム校長の話。

・「グループ・インテグレーション(インクルーシブ教育の意味)」に10年ほどとりくんでいる。1クラスに4人の知的障害児がいっしょなのはフィンランドでもはじめて。親の要望もあって、目的は「クラスに仲間がいる」だった。

・2クラスを一つの大クラスとしたが、良い結果を得た。よく機能した。50人のクラスに教師2人+アシスタント2人の体制。1年～6年までクラスも担任もずっと変わらなかった。

・中学校に行った子らはこの1年、なかなか大変だった。教科担任制だから先生がしょっちゅう変わった。これは落ち着かない。勉強も中学では難しくな



る。健常の子たちとの差が大きく開いた。

「インクルーシブ教育をとりくんで、一番良かったことは？困ったことはなんですか？」と質問。

校長は、「大きなクラス編成にしたことがよかった。イジメなどの問題が起きても、小さなクラスだとあとあとまで響くが、大きなクラスだと問題がうすまる」「担任やアシスタントが変わらないことが大事。先生たちは6年間、このとりくみをよく理解して、サポートしてくれた。学校全体もわかり合う雰囲気を持てた。それが全体に広がった。」

そして、「校長はなんでこんな校長になったのか？自己形成史を教えてください！」

○ヘレストローム・マルッティ校長の話

<http://youtu.be/Fj3sWK0T8Vc>

(菌部英夫)

■姫リンゴの花咲くフィンランド

夏休み=6月1日～8月15日。大学は5月11日～9月11日。社会人は4週間。子どもたちは学校が休みの間=父と2週間過ごし、両親と2週間過ごし、母と2週間過ごす。残りの4週間はNPO主催のキャンプ等で過ごすのだそうだ。

オーロラ学校の職員の休憩室は大きなコーヒー等マシンがあり、キッチン付きでソファ、テーブル、椅子があり、居間のような感じ。

フィンランドの学校は命令ではなく信頼と理解に基づいた話し合いが基本。校長の役割は先生のやる気を引き出す、先生は生徒のやる気を引き出すこと。いままでは国で1～2年24人、3～6年32人学級だったがこれは廃止され、自治体毎に学級定数が決められるようになった。

技術室も見学したが本格的。陶芸用の窯もある。木の国なので4年生は木でバターナイフをつくる。おみやげに頂いた。

(矢代美知子)